

行きたくないところへ・・・

奨励	佐藤 泰彦〔さとう・やすひこ〕
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

「はっきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」

(ヨハネによる福音書 21章18節)

「大学院生」というご紹介で、きっと若い人だろうと思われたことと思いますが、私は、40年間務めた中学・高校の教員を退職してから、神学研究科で学んでおります、佐藤と申します。若い学生さんから「どうして、大学院に入ろうと思われたのですか」と質問を受けることがあります。答えは「だって、退職して家にいたら、奥さんが怖いでしょ」です。若い方の多い大学ではふさわしくないかもしれませんが、高齢者のことをお話しさせていただきます。

姿の見えない老人

2013年、日本人女性の平均寿命が世界第1位を回復。三浦雄一郎氏が80歳にしてエベレスト登頂という喜ばしいニュース。100歳を超えた今も診察を続け、新しい挑戦に意欲を燃やしておられる聖路加国際病院の日野原先生。街中でも教会でも多くの元気な高齢者を見かけます。大学では高齢者たちが若者に交じって学んでいます。私もその一人です。しかし、彼らは「高齢者」ではあっても、「老人」ではないのです。本当の老人の姿は見えないのです。彼らを街中で見かけることはありません。老人の多くは、独り家の中にいて誰も話す相手がいないのです。家の中では夫婦が老老介護で、疲れ切っているのです。老人ホームに預けられ、あるいは病院のベッドに伏していて、外出することはないのです。

先ほど読まれました聖書箇所「あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる」（ヨハネによる福音書21章18節）は、ペトロがどのような死に方で、神の栄光を表すようになるかを示そうとしたイエスのお言葉ですが、同時に、イエスは現代にも共通する老人の状況を深く見抜いておられます。

むかしラブラブ、いま介護

私は時々、認知症が進んだ母がお世話になっている特別養護老人ホームに食事介助に行きます。ボランティアというような立派な動機からではありません。母を、必ずしも行きたかったわけではないところへ連れて行ったことに対するささやかな罪滅ぼしです。

入居者たちは30分も前から車いすで食卓に連れて来られ、食事を待っています。40人ほどいるのに、誰も話す人はなく非常に静かです。やがて食事が運ばれてきます。でも、嬉しそうな顔は見当たりません。何人かの人たちは、食事に手をつけようとしません。介護士さんが声をかけては、スプーンで食べ物をお年寄りの口に運びます。ある人は、食事を目の前に居眠りをして、またある人は、一口食べては、次の一口を拒否したり、介助する人に怒りを示したり、お皿をひっくり返したり、世間ではあり得ない光景が繰り広げられます。「『アーンして』むかしラブラブ いま介護」（公益社団法人 全国有料老人ホーム協会「シルバー川柳」より）の川柳も、ここでは笑えない現実なのです。

ここの入居者の約8割は女性です。でも、女性が好きなおしゃべりもなく、家族の顔も、言葉も、食べるという生物にとって最も本能的な行動さえ忘れ、みんな無反応で表情がありません。

入居者と対照的に、若い介護士さんたちが笑顔でキビキビ働いている姿にようやく「生」を感じます。彼らはすばらしい働きをしています。ケアしているお年寄りから「ありがとう」と労われることはないのですが、逆に、「食べてくれて、ありがとう」と笑顔で接しています。

入浴もシモの世話も介護士さんの手を借りざるを得ません。男性の介護士からそのようなケアを受けることに恥ずかしさを感じることもないのです。ここのご婦人たちも、50、60年前には、美しく生き生きと輝いていて男たちを虜にしたり悩ませていたりしていたことでしょう。

でも、老人ホームに入居してケアを受けられている人はまだ恵まれていると言えます。平均寿命がさらに伸び、認知症患者が膨大になる中で、福祉の見直しが進められようとしているのです。

おばあさんの想い

私の顔も私との関係も認識できなくなった母が今、どのような思いを抱いているのかを聞き出すことはできません。代わりに、英国スコットランドのある老人病院にいるおばあさんの、いえ、おばあさん本人ではなく、おばあさんの気持ちを察した家族が看護婦さんが書いたと思われる「私を見てちょうだい」という詩をご紹介させていただきます。少し不適切な表現もありますが、あえて訳文のままお読みします。

私を見てちょうだい
あんたがたに見える私は、
ただの不機嫌な顔をしたボケ老人でしょうね。
ぼんやりとうつろな目をして、
次に何をしたらいいかも分らない老人でしょうね。
ボロボロこぼしながら食べ物を口に運び、
「ちゃんと食べて」と大声で言われても、返事もしない老人でしょうね。
看護婦さんのしてくれることには、知らん顔をして、
年がら年中、靴や靴下の片方を探している老人でしょうね。
お風呂や食事を嫌がってみても、どうせ他にすることもないからって、
結局は言いなりになる老人でしょうね。
どう、このとおりでしょう？
これが、あんたがたに見える私でしょう？

さあ、看護婦さん、
よーく、目を開けて私を見てちょうだい。
ここでじっと座って、命令されるままに動き、言われるままに食べる私が
本当はどういう人間なのか教えてあげるから。
私はね、10歳の時には、両親や兄弟の愛に囲まれた子どもだった。
娘盛りの16には、愛する人に巡り合う日を夢見る乙女だった。
20歳で花嫁になり、心弾ませて「この人に一生を捧げます」と誓ったのよ。
25には母親となって、子どもたちのために安らぐ家庭を築こうとした。

もう私は年老いてしまった。
年の流れは、情け容赦なく年寄りをおろかに見え、身体をぼろぼろにし、
美しさも生気もどこかに追いやってしまう。
そしてかつての柔らかな心は、石のように閉ざされてしまった。
でも、この朽ちかけた肉体の奥には、若い娘がいまだに棲んでいるの。
この苦しみに満ちた胸は、今一度過ぎ去った日々を思い出しては、
喜びに弾み、悲しみにふさぐ。
こうして人生を慈しみながら、もう一度生きなおしているの。
駆け足で通りすぎていった、あっと言う間の年月を思うと、
人生のはかなさをつくづく思い知らされる。

そうなの、だから看護婦さん、よく、目を開けて私を見てちょうだい。
ここにいるのは、ただの不機嫌なボケ老人じゃない。
もっと近くによって私を見てちょうだい。

(著者不明—スコットランドのある老人病棟から見つかった詩)

多くの苦節を乗り越えて、やっと迎える人生の最終ステージがこれならば、「なんという空しさ／なんという空しさ、すべては空しい」(コヘレトの言葉1章2節)という聖書の言葉のように、人生はあまりにも空しいのではないのでしょうか。だから、人びとはアンチエイジングに時間とお金をかけます。しかし、それも確実にやってくる老いや死から目を背ける空しい努力にすぎないのかもしれない。

すべてを受け止めてくださる方

人生とは一体何なのでしょう。「老い」とどう向き合えばいいのでしょうか。老人にとっての「救い」とは何なのでしょう。若い世代は、老人とどう接するべきなのでしょう。

旧約聖書時代の人びとは、歳をとり、寿命を全うして死ぬことを神の恵みとしていました。

「生が恵みならば、老も病も死も恵みである」と言われます。私もそう思いますが、「老」の現実とは、そのような美しい言葉で括れるほど甘いものではありません。

しかし、大切なことは、「私たちの人生はなぜこんなにも空しいのですか」と、神さまに向かって問いかけることができること、その問いを受け止めてくださる神を信じていることができることではないのでしょうか。

いつまでも若々しく張り切って生きる、すばらしいことです。でも、もっとすばらしいのは、年齢と共に体も心も歳を取ることでないのでしょうか。私たちは、生を受けたと同時に、老いも病も死も一緒に受けたという事実を直視すべきではないのでしょうか。

2014年7月15日 今出川火曜チャペル・アワー「音楽礼拝奨励」記録